

# 刀剣の歴史と思想

第16回

酒井 利信

## 『平家物語』にみる三種の神器

三種の神器は天皇の位を象徴するものであり、そもそも天皇を中心とした公家の社会にかかわるものであつたが、その時代、実際にはこれが重く扱われてはいなかつた。

しかし、これが武士集団が台頭し、武家社会となると様相は大きく変わる。三種の神器は、源平争乱を契機に、一躍歴史の表舞台に踊り出し、その中でも宝剣である草薙剣がひときわ注目をあびることとなる。

今回は、『平家物語』を手がかりにこの辺りを探つていきたい。

### ▼三種の神器争奪戦

いまさら『平家物語』を紹介する必要もないとは思うが、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす」、ではじまる中世日本を代表する文学作品といえよう。当時最大の武士集団であつた平家の栄華と、その後の没落から滅亡への過程を描いた、まさしく諸行無常の世にあつて盛者の三種の神器に関する記述がみられる。

必ずモチーフとした、いわゆる軍記物語である。時代は、宮廷貴族の世から武家が台頭しその後の日本史を事実上長く動かすようになる、歴史的大転換期にあたる。『平家物語』の成立については明らかになつていないことが多いが、鎌倉時代初期の成立といわれ、そもそも盲目の琵琶法師の弾き語りにより語りつがれてきたものであり、中世において広く人々に享受された。この『平家物語』に、おびただしいほど



# 刀剣の歴史と思想

『平家物語』にみる三種の神器



安徳天皇を祀る赤間神社（山口県下関市）

前の時代、「三種の神器」の表記すらみられず、神器そのものがさして重く扱われることのなかつたことから考えると、ここに思想としても大きな変化があつたと考えてよいだろう。

以下、『平家物語』の描写をながめてみたい。

## ▽主上都落

源平争乱の最中、いよいよ旗

色が悪くなり都落ちを余儀なくされた平家は、後白河法皇にも離反されて大きな打撃を受け

る。平家は当時まだ六歳の幼い

安徳天皇をともない、内侍所（宝鏡）・神璽（曲玉）・宝剣の

三種の神器をもつて、京の都から西海へと落ちてゆく。このこと

とが後に大きな問題に発展する。

## ▽福原落

旧都である福原に到着した平家であるが、一門の総帥である

宗盛が次のように説く。「おまえ

たちは一時的な家来ではなく先祖代々の家である。代々恩義の厚い者もいる。平家が榮えていた古には、その恩恵をこうむつて自分たちの繁栄を願つてきた。今どうしてその恩恵に報いないのでよいということがあらうか。そのうえ十善帝王（安徳天皇）が三種の神器をたずさえて「行幸されてい

までもお供しようとは思わないか」と。この後、平家は海路九州へと落ちてゆく。法皇は、安徳天皇が平家に囚われ西海の浪に漂つていると嘆き、天皇ならびに三種の神器を返還するよう院宣（法皇の命令をうけてだす公文書）をくだした。

## ▽山門御幸

しかし、平家はこれを受け入れなかつた。源範頼と義経は、院の御所に参上して、平家追討のために西国へ向かうことを申しあげると、後白河法皇から「わが国には神代より伝わる三つの御宝がある。内侍所と神璽、宝剣がこれである。よく注意

して無事に都へお返し申しあげよ」と命ぜられた。兩人は、つつしんでこれを承つた。



△内裏女房  
一谷の戦で捕虜となつた平重衡に、  
院の御所から使いとしてやつてきた藏人  
左衛門権佐定長が、いふには、「法皇が仰  
さえもんのこんのすけただなが

せようどいうときである。伊勢大神宮、石清水八幡宮、加茂、春日神社へ勅使がおくられ、主上ならびに三種の神器が無事に返ることを祈祷するように命じられた。

多く引用してきたが、いずれも三種の神器争奪をめぐる源平双方の激しいやりとり

の模様である。源平とともに執拗なまでのこ

つて いるのかとい う社会的立場の問題であ  
る。大き く世間をまきこんで武力を行使し  
て いることの大義が必 要であつた。

だわりがあり、三種の神器に対する執念すら感じられる。平家は三種の神器をもち、これを精神的支柱とした。一方源氏は、はじめ公権力にものをいわせて神器を奪還しようとするが、これがかなわなければ策を

天皇の位を継承するのが代々三種の神器を受けついでいく制度は、この時代までに確立しており、社会の中ですでになじんでいる。この三種の神器をもつてゐるかどうかが官軍と賊軍の境になつてゐるといふ

めぐらし取り引きをしようとする。結局こ

ことである。

三種の神器争奪戦  
執拗なまでのこだわり  
なぜ  
←  
正義の味方  
官軍の証

後白河法皇は、「天皇は宮城をでて諸国に行幸し、三種の神器は南海、四国にうずもれて数年がたつ。これは朝廷の嘆きであり亡国のもとである。そもそも重衡は東大寺焼失の逆臣であり、頼朝のいうように死罪にするところであるが、三種の神器を返還するならばゆるして釈放するであろう」という内容の院宣を下す（<sup>10</sup>）。

しかし、平家側は、これにも応じない（2）。

彼らをこういった行動にかりたてた心理的背景はいかなるものだつたのだろうか。

公家社会であつた前時代に、神器は社会のなかでさほど大きな機能を果たしていなかつたが、ここにいたつて三種の神器は武

めぐらし取り引きをしようとする。結局これも果せずに最後は神頼みまでする。興味深いのは勝ち戦をしている源氏がこういった行動にでているということである。そして平家も絶対にこれを手放さなかつた。つまり戦況に關係なく三種の神器へのこだわりがあつたということであり、両軍いかにこれを重視していたかということである。

ことである。さらに『平家物語』を見渡して気づくことは、この社会的立場の違いは天皇と同行しているかどうかということより、三種の神器をもつてているかどうかにかかっているような傾向が強くなる。安徳天皇がまだ幼く実際の政治能力がなかつたであろうことは別に、三種の神器の優位性を感じる。

### 三種の神器の優位性



# 刀剣の歴史と思想

『平家物語』にみる三種の神器

源氏の兵ども、すでに平家の舟にのりうつりければ、水手楫取ども、あころされ、きりころされて、船をなをすに及ばず、舟ぞここにたはれふしにけり。新中納言知盛卿小船にのきて御所の御舟にまいり、「世のなかいまはかうと見えて候。見ぐるしからん物どもみな海へいれさせ給へ」と

『平家物語』最大のクライマックスは、平家一門の最期の様子を描いた壇ノ浦の合戦であろう。三種の神器のことが宝剣に特化してくるのはここからである。まずは「先帝身投」の件からみていいたい。

## ▼ 壇ノ浦での宝剣紛失

家の社会的立場を決定づける重要な役割を果たしている。公家の中核である天皇の位の象徴が、公家の社会ではとして重視されず、武家社会になつてはじめて脚光をあび、かくも重視されたことに三種の神器の面白さがある。

て——中略——二位殿はこの有様を御らんじて、——中略——神璽をわきにはさみ、宝剣を腰にさし、主上をいだきたてまつて、「わが身は女なりとも、かたきの手にはかゝるまじ。君の御ともにまいるなり。御心ざしおもひまいらせ給はん人々は、いそぎつき給へ」とて、みなばたへあゆみいでられけり。主上ことしは八歳にならせ給へども——中略——「尼尼<sup>（あま）</sup>」<sup>（あま）</sup>してゆかんとするぞ」と仰ければ、いとけなき君にむかいたてまつり、涙ををさへ申されけるは、「君はいまだしろしめされさぶらはずや。先世の十善戒行の御ちからによ<sup>（よ）</sup>て、今万乘のあるじと生<sup>（うま）</sup>れさせ給へども、悪縁にひかれて、



現在の壇ノ浦（山口県下関市）



御運既につきさせ給ひぬ。まづ東にむかはせ給て、伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ、其後西方浄土の来迎にあづからんとおぼしめし、西にむかはせ給ひて、御念佛さぶらふべし。この国は心うきさかるにてさぶらへば、極樂浄土とてめでたき処へぐしまいらせさぶらふぞ」と、なく申させ給ひければ、——中略——一位殿やがていただき奉り、「浪のしたにも都のさぶらうぞ」となぐさめたてまゝて、ちいろの底へぞいり給ふ。

壇ノ浦の戦いは海戦である。源氏の兵どもがすでに平家の舟にのりうつり、漕ぎ手も舵取りも射殺され、あるいは斬り殺されるなどして舟は操舵不能となる。新中納言知盛卿は天皇のお乗りになつてゐる舟にきて「平家の世もいよいよこれまでかと思われます。見苦しいものはみな海にすてください」と申し上げた。この有様をご覧になつた二位殿こと平清盛の妻時子は、神璽（曲玉）を脇にはさみ宝剣を腰にさし、安徳天皇を抱いて「わたしは女であつても敵の手にはかかりません。君のお供をして

参ります。帝を思うものは急いであとにつきなさい」と言い、舟ばたに歩まれた。今年八歳になる天皇が「私をどこへ連れて行こうとするのか」と言われたのに対し、涙をおさえて「君はまだご存知ではございませんか。前世での善行によつて天子としてお生まれになりましたが、悪運にひかれてご運はすでに尽きました。まず東に向かつて伊勢大神宮にお暇を申しあげ、そのあと西方浄土の仏菩薩に迎え導いてもらえるよう西に向かつて念佛をお唱えください。この国は辺ぴなところです。極樂浄土というめでたいところへお連れします」と申し上げた。そして二位殿は天皇を抱き、「浪の下にも都がござります」との言葉を最後に、



赤間神社内、平家一門の墓



# 刀剣の歴史と思想

『平家物語』にみる三種の神器

海底に沈んでいったのである。

平家の敗北が決定的となつた場面での安徳帝の身投げ、そして神璽と宝剣入水のシーンである。

神璽は、この後、片岡太郎経春という者が箱ごと海上に浮かんでいたものを取り上げ、無事であった。

では宝鏡はどうしたのかという疑問が残るが、これについては「能登殿最期」の件に記述がある。

大納言の佐殿（平重衡の妻）は、内侍所（宝鏡）のはいつた櫃をもつて海に入ろうとしたが、袴のすそを舟ばたに射つけられてとりおさえられた。武士どもが内侍所の

入った櫃の鎖をねじ切つて蓋を開けようと

したとたん、彼らはたちまち目がくらみ鼻血を出した。生け捕りになつていた平大納言時忠が「それは内侍所であるぞ。凡人が見てはならぬ」と言うと、兵どもはみな立ち退いた。といった内容である。

つまり、宝鏡は無事であった。

その後「内侍所都入」の件で、四月三日に、九郎大夫判官義経が源八広綱を院の御所につかわして、「去る三月二十四日、長門国壇ノ浦において平家を攻めおとし、三種の神器を無事にお返しする」むね申しあげたので、院中はたいへんな騒ぎとなつたことが記されている。しかし、二十五日

の夜の子の剣（十二時ごろ）に、内侍所と神璽の箱は太政官の庁に届けられたもの、宝剣は失われていたことが記されている。

宝剣の紛失が決定的となつた描写である。

三種の神器の中で宝剣である草薙剣は、壇ノ浦の事件で紛失してから、ことさら注目されるようになる。

▼▼中世神話としての「剣」卷

『平家物語』には「内侍所都入」の次に



# 刀剣の歴史と思想

## 『平家物語』にみる三種の神器

ある博士のかんがへ申けるは、「むかし出雲国ひの川上にて、素戔烏の尊にきりころされたてまつし大蛇、靈剣をおしむ心ざしふかくして、八のかしら八の尾を表事として、人王八十代の後、八歳の帝となつて靈剣をとりかへして、海底に沈み給ふにこそ」と申す。千いろの海の底、神龍のたからとなりしかば、ふたゝび人間にかへらざるものことはりとこそおぼえけれ。

あるものが占つていうには、「むかし出雲の国ひの川上でスサノヲに斬り殺され

〔剣〕**卷**といわれるものがある。平曲<sup>(4)</sup>の秘事として当時大変に尊重されたもののようにあるが、内容的には全体のなかでかなり異色の感がある。ヤマタノヲロチ神話、天孫降臨神話、神剣の模造、ヤマトタケルの東征、神剣盜難、宝剣入水、宝剣紛失の由来について述べている。

おおむね記紀神話などの内容に準ずるものであるが、独自のおもしろい解釈ものせている。

三種の神器をもつものは官軍であり、正義の味方は勝たなくてはならなかつたが、実際にこれを有する平家は亡びた。それゆえに神器は海底に沈まなくてはならなかつたが、さらにこのうち宝剣のみが紛失する。ここにはひとつ歴史の綾のようなものを感じるのであるが、これを『平家物語』なりに解釈したものが、「剣」卷の独自の解釈ということになろう。

古代神話を基本としながらも中世において焼き直しがなされた、いわゆる中世神話である。こういった新しい神話が創造されること自体、草薙剣への注目度がうかがわ

た大蛇が、靈剣を惜しむ気持ちが深く、八つの頭と八つの尾を示して、人王八十代の後、八歳の帝となつて靈剣を取り返し海底に沈んだのであらう」と。海の底で神龍の宝となつたのだから、ふたたび人間のものに戻らないのも道理であると思われる。と云つた内容である。

宝剣がなくなつたことについての独自の解釈である。

三種の神器をもつものは官軍であり、正

衡がいうには、「重衡ひとりを惜しんで、わが国の重宝である三種の神器を返還するとも思われないので、このようない返書の趣旨は予想していた」と。(戒文)

(3)「官軍」という言葉 자체、後の時代のものであるとの指摘もあるが、ここではこの語により読者のニュアンスを喚起し、理解を容易にするためにあえてこの語を使用した。後述の「賊軍」も同じ。

(4)琵琶の伴奏で弾き語りをする語り物としての『平家物語』。

〔剣〕**卷**

(1)この院宣については、物語の虚構といふ説もある。

(2)平家側の描写として、以下のようないう説もある。

新中納言知盛が諫めていうには、「三

種の神器を返還しても重衡が返されるこ

とはないであろうから、その旨を返書で

かくべきだ」と。大臣もこれを承諾して

返書を書いた。(請文)

